

史遊会通信

No.221 号
平成 25 年
6 月 13 日

臨時事務局
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

五月講演要旨

日本太古史と兼農サラリーマン

三戸岡道夫

一、日本太古史

明治時代の民間歴史学者である木村鷹太郎は、「日本太古史」という巨大にして偉大な本を著した。上巻が七五四ページ、下巻が九七二ページという巨大なもので、明治四十四年上巻を、明治四十五年に下巻を発行した。それは日本の古事記、日本書紀と、ギリシャ神話などを対比し、その類似性から

(日本の古代はギリシャにあった)
と結論した、日本太古史である。
たとえば、その類似性をあげれば、

天照大神は、アフロデテー女神であり、すさのおの命は、ヘラクレスであり、日本武尊は、アポロの神であり、イザナギノミコトは、ゼウスであり、等々、その例証は本の各ページに満ち溢れている。

明治四十四年にそれを発表すると、歴史学会、言語学会からは、これは妄想だ、空想だと批判され、受け容れられなかった。生来才気煥発で、語学に抜群の才能を持ち、妥協を知らない木村鷹太郎は、自分の意見と合わない歴史学者をこ

例会のお知らせ

◎ 6月例会

日時 平成25年6月26日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 千坂精一氏

テーマ なぜ忠臣蔵が持て囃される

自由執筆者 小田紘一郎・鯨遊海・

三戸岡道夫の諸氏

締切 6月末日

◎ 7月例会

日時 平成25年7月24日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 太田精一氏

テーマ 未定

自由執筆者 隆恵・中込勝則・

千坂精一の諸氏

締切 7月末日

とごとく攻撃し、論破し、そのため「キムタカ」の呼ばれ、論壇から恐れられた。

そのキムタカは明治三年に愛媛県宇和島市に生まれ、明治二十三年(二十一歳のとき)に東京帝国大学の史学科に入学し、のちに哲学科へ移った。

明治三十四年(三十二歳のとき)以降は、ロマン派文学とギリシヤ古典研究に没頭した。明治三十五年「バイロン文学の大魔王」を著し、それから明治三十六年から明治四十四年にかけて、九九年の歳月をかけてプラトン全集の個人完訳を実現した。

そしてそのようなギリシヤ研究の蓄積の上に立って、明治四十四年、五年と、二年にわたって日本太古史を書き上げたのである。

しかしその日本太古史は、歴史学界からは無視され空想史と批判され、発禁処分にされてしまった。しかしこの日本太古史は歴史学界に、

(空想史の価値)

という問題を投げかけたといえるのではないだろうか。

空想史に対する、正しい歴史は「正史」である。正史とは、資料に裏付けられたものである。すると、

(資料とは何ぞや)

ということになる。

しかし資料といっても千差萬別であり、また現実に資料として記録されていない歴史事実の方が多いためであるから、正史だけが正史ではない、空想史の中にも正史があるのである。

いや、場合によっては空想史の正史の方が、眞の歴史である場合もあるのではなからうか。

資料のみにこだわらずに、独断と偏見を持って空想史の中に潜水夫のようにもぐり込んでみる。するとそこに正史に現れない、眞実の歴史が現れるのではあるまいか。

史遊会の創始者の今野先生の言われていた「独断と偏見」とは、この事を言ったのだと、最近やつと気がついた次第である。

二、兼農サラリーマン

兼農サラリーマンとは兼業農家に対する言葉であり、最近、神奈川県南足柄市の古屋富雄さんが言い出した言葉で、これからマスコミに出ようという言葉である。

現代日本の農業の問題点は、親が農業をやっている、子供はサラリーマンなどになって農業をやらず、これが兼業農業である。

そのため親が老齢化しても後を継ぐ人が居らず、耕作を放棄した荒廃農地がふえ、十年も

たてば日本の農業は無くなってしまおうのではないか、と言うことである。

それを解決するのが兼農サラリーマンだというわけである。

すなわち最近兼業農家とは反対に、サラリーマンでも農業に関心を持ち、サラリーマンでも農業をやる人が増えてきている。それを兼農サラリーマンというのであり、将来は兼業農家に代って、農業の柱になっていくというのである。

いま日本はTPPという問題に直面しているが、これは日本の農業を改革する絶好のチャンスである。

日本の農業も大規模にして、コストダウンを図っていけば、TPPによって、関税が撤廃されても、こわくはない。農業の大規模化とは、農業の株式会社化である。そして今後の日本の農業は、一般の産業と同じように、大企業と中小企業とになっていくのではあるまいか。

すなわち「兼農サラリーマン」は更に「兼農カンパニー」へと前進するのである。

このようにすれば現在問題になっている耕作放棄地なども、たちまち解消するであろう。

そして兼農カンパニーによってコストダウンが図られれば、農産物の輸出も可能になる。

今後の日本の経済は、自動車や電気製品などの輸出と並行して、農産物の輸出国としても発展していく可能性がある。その手本がオランダである。
(以上)

自由執筆

出雲大社再考 (二)

千家本家説の定着

村上 邦治

興国四年(一三三三)五十五世清孝の死後、それまで一統を続けてきた出雲国造家は、遂に、千家家と北島家に分裂した。

この史実は、父五十四世孝時の譲状に、長男清孝が、背いたことが発端であった。

すなわち、父の遺命は

「五十五世清孝は、一代だけ所領所職を相伝し、その後は、三男資孝に伝えるべし」

というものであった。しかし清孝はこれを守らず、二男孝宗に譲ったのである。

この譲状を所有する北島家では、「清孝死後は、一代限りの遺命により、資孝が父から直接

相伝した」として、世襲儀式(神火相統)を行い、ここに一統が崩壊したのである。

分立後は、大社の祭祀権を巡り、二家による本家争いが、五〇〇年にわたり繰り返された。史実からは、北島家の主張に説得力があるものの、北島家を支援した出雲守護塩谷判官高貞が、高師直に滅ぼされたことから、大きな後ろ盾を失った。

一方、千家孝宗は、病弱であった五十五世の八年間、全ての祭祀を代行し、神職達の信頼を得ていた。また支援者山名氏の勢いもあり、両家いづれも本家と称し、争いは続いたのである。しかし、年間七十二回の祭りをを行う大社祭祀については、月毎交互に行うことで和解し、滞りなく維持された。

両家の抗争は、江戸期末まで続いたのであるが、明治維新の新神社政策により、実質的に決着した。すなわち、主要神社は国家管理となり、明治六年出雲大社は、官弊大社という神社社格の最高位に位置付けられた。出雲大社宮司については、南北朝から続く二家を認めず、千家尊福を任命、一方北島脩孝は、岡山県吉備津神社宮司に発令したのである。北島家はこれに従わず、大社東側の北島国造館に留まった。しかし大社祭祀には、最早かわる事は、できなくな

ったのである。

明治政府のこの決定は、本家争いの裁定を下したということではなく、千家家当主の尊福が、大きく影響を及ぼした、とみるべきであろう。この時期、尊福は既に神社神道の指導的理論家として、頭角をあらわしていた。また神道布教を指導する教導職最高の大教正にあり、西部管長の要職にあった。政府としては、既に五百年前に遡る両家分裂の史実よりも、神社神道界の中心的立場にあった尊福を無視する裁定は、できなかったものと思われる。

その後尊福は、大社宮司を弟の尊紀に譲り、自らは出雲大社教を起こして、全国に布教活動を行う。驚くことは、その後の政治家としての活動である。明治二十三年(一八九〇)貴族院議員となり、埼玉県、静岡県、静岡県の県知事を歴任、その後東京府知事を、官選では桁はずれに長い十年間務めた。さらに四十一年(一九〇八)には、西園寺内閣の司法大臣に就任するのである。明治期以降、大社宮司は千家家に定着、千家尊福の並外れた行動・栄進に伴い、北島家の本家の言い分は、霞んでしまったのである。

留意したいのは、千家本家説を、意図的に後押しする動きが、散見されることである。

『古事類苑』は、明治政府により、日本の古代から江戸末期までの膨大な古文書を、項目毎に編集した類書（一種の百科事典）である。当時最高の学者を動員し、明治二十九年から刊行開始され、完了したのは大正三年という一大事業である。

この中の「神祇部」に出雲大社は四八ページにわたり集録され、うち一五ページは出雲国造に関するものである。その中には、神火相続の項があり、両家分立の経緯は三ページに纏められ、四文書を掲載している。

まず地誌『懐橋談下』により、ほぼ北島家の言い分を載せている。次に『千家国造文書』として「康永二年（一三四三）清孝讓状」、「同年妙善書状」を載せている。これらにより、清孝から孝宗への世襲が、正当なものと思わせる。最後に、『懐橋談後編』を載せ、千家家の言い分（千家本家説）を、結論として示唆している。

これらの文書は、公平性に欠き、偏りすぎた掲載であると指摘されよう。

最大の論点は、五十四世孝時の讓状である。これを掲載せず、千家家言い分の文書のみを掲載し、母の書状により補強している。最後は、同じ地誌ながら、前の説明と相矛盾する千家本家説を結論付けたものである。史実の歪曲を図

ると非難されても仕方がなからう。

次に、北島家にて指摘しているが、昭和十二年平凡社『神道大辞典』や、昭和四十三年堀書店『神道辞典』において、千家家始祖孝宗は、清孝の子として記されており、千家本家説を導きかねない誤った記載をしている。北島家が避難するのも理解できよう。

最後に、北島家始祖貞孝を、千家家では、祖母（塩谷判官高貞の姉）の子として主張している。これに対し北島家では、「今日では千家家でも清孝、孝宗、貞孝が兄弟であることは認められておられると理解しています。」としている。しかし『出雲大社』平成二十四年第三版においても、訂正されておらず、以前からの主張を踏襲したままなのである。

これらの文献は、分立の史実を、歪めかねないものといえよう。

参考文献

- 「出雲大社の古文書」村田正志（東大助教授 國學院大學教授）『季刊神道史学』第四号（昭和二十八年）
- 『出雲大社』第三版 千家尊統 学生社
- 『北島国造家沿革要録』十版 出雲教

自由執筆

これはのきみあさまろ
伊治公咎麻呂事件

平山 善之

伊治城は現在の宮城県栗原市に築かれた。続日本紀によれば、称徳天皇の神護景雲元年（七六七）十月、陸奥国に伊治城成ると聞き天皇が大層悦び勅語を發した。

「陸奥国の奏する所を見て、即ち伊治城作り了れることを知りぬ。始より畢に至るまで三旬（三十日）に満たず。朕甚だ嘉す。夫れ危に臨み・・」で始まる長文のもので関係者を賞して各々位階を進めている。同二年十二月には「伊治・桃生に住まむとねがふ者は情に願うに任せ、至るに随いて安置し、法に依りて復を給ふべし」と移住を奨励した。例えば本居から旅程十日以上離れて移住する者は三年間税を免ずる、というのである。さらに同三年二月、再度勅して「桃生・伊治の二城は、营造已に畢りぬ。その土沃壤にして、その毛豊饒なり。（中略）法の外に優復して、民をして遷ることをねがわしめよ」と優遇巾を拡げて勧誘させた。それでも移住者は無かったのか、この年の十二月には

「浮岩の百姓（浮浪者）二千五百餘人を陸奥国伊治村に置く。」大変な執心でこの拠点確保に努めたことが分る。

しかし、この豊饒の地は無人の土地ではなかった。畿内政権がえみしと称し蔑んだ原住民たちがいたのである。彼らは表面畿内政権に従い、その首長は伊治公皆麻呂という姓名を貰っていた。彼らは城にやってきて威張り散らす官人や、ろくでもない移住者たちを、どんな目でみていたかは想像に難くない。果たしてこの頃から、陸奥国の地は騒然とした空気に包まれる。

光仁天皇の宝亀五年(七七四)七月天皇は鎮守將軍大伴駿河麻呂、副將軍紀広純らに「蠢けるかの蝦狄、野心をあらためず、しばしば境を侵して、敢えて王命をそしる。事已むことを得ず。一に來奏に依りて、すみやかに軍を發して、時にあたりて討ち滅ぼすべし」と命じた。その二日後、陸奥国から「海道の蝦夷、忽に徒衆を發して、橋を焚き道を塞ぎて既に往來を絶つ。桃生城を侵してその西郭を破る。鎮守の兵、勢い支ふること能わず。」と言ってきた。所謂、三八年戦争の始まりである。

宝亀十一年(七八〇)三月二十二日、伊治公皆麻呂が叛く。

彼はその時陸奥守兼按察使であつた紀広

純の下で伊治郡大領であつた。紀広純は皆麻呂が蝦夷であることを意に介せず信用していた、とある。ところが、牡鹿郡大領、道嶋大楯という者が居て、夷俘として常に皆麻呂を侮っていた。皆麻呂は深くこれを恨んで機会をみて大楯を殺し、次いで伊治城内で広純を殺した、という。

皆麻呂の反乱をあたかも私怨に基づくかのように矮小化しているのは、続日本紀の著者藤原繼繩(南家・武智麻呂の孫。豊成の次男)の認識不足か、或いは故意か。

皆麻呂はこの後、多賀城を攻め火にかけている。(別人という説もある。) 多賀城は七二四年に築かれた陸奥国府、畿内政権の東北攻略の本拠地である。「その城、久しき年、国司治る所にして、兵器・磁甍、あげて計うべからず」「賊徒すなわち至り、争いて府庫の物を取る。重きをこぞりて去る。その遺れるものは火を放ちて焼く。」

この行動が、夷俘と馬鹿にされたことによるものでないことは明らかである。畿内政権による侵略、移住政策で彼らの生活基盤を奪って当然とする思いがり、そうしたものに對する已むに已まれぬ住民の抵抗運動だつたと思われる。

皆麻呂がその後どうなったか、続日本紀は沈黙している。乱勃発直後、著者繼繩が征東大使に任命されたが、半年で北家・房前の孫、藤原小黒麻呂に替えられている。兵士の甲や衣類を西から送らせたといった些少な記事や光仁天皇、次いで即位した桓武天皇の叱咤する勅語はあるが、小黒麻呂がどのように鎮圧したかは全く記されていない。

続日本紀にはただ、翌年天応元年八月、「陸奥按察使正四位下藤原朝臣小黒麻呂、征伐の事畢りて入朝す。特に正三位を授く。」とあるだけである。この時、從三位の繼繩は飛び越されたのである。翌月彼も正三位となるが、その苦々しい思いを感じるのには、読みすぎであろうか。

六国史は当時の近現代史である。関係者で生きていく人も多い。都合悪ければ隠蔽したり、誇張や歪曲もある。一族とはいえ、藤原氏内の対立抗争もある。加えて都の貴族には住民側に立つた見方は不可能であつたらう。

我々は歴史書を読むとき心しなければならぬと思う。

自由執筆

『東北における大陸文化』

漆原 直子

東北地方の歴史と聞くと、豊かな縄文

文化と“蝦夷”の世界というイメージをもつ。蝦夷は日本列島の先住民としての縄文文化と北海道を中心に栄えた統縄文文化、擦文文化との関係が深い。その一方で、畿内のヤマト政権成立以来、中央からは蛮族と見なされ、豊かな資源の篡奪を目的とした“征夷”と、“俘囚”として様々な強制労働を強いられてきた。そして東北地方の文化は、西日本から畿内を通じて北上して行ったという認識が一般的になっている。しかし、本当にそのような一元的な歴史展開しかしてこなかったのだろうか？東北地方で出土している遺物の中には、畿内周辺では見られない大陸由来の遺物が少なくない。いくつか時代をおって、その例をあげてみたい。

【縄文時代】

①刻文付有孔磨製石斧（玉斧）

山形県羽黒町大字川代中川代遺跡（月山の麓）より出土。縄文時代中期の大木式土器と共伴して出土。中国大汶口文化期B C四千年からB C

二千年前の新石器時代後期のものに対応するとされている。石斧の刻文は甲骨文字と類似している。しかし、中国では線刻のある石斧は発見されていない。戦後に中国大陸から引き揚げてきた軍人が、持ち帰ってきていたのではないかと、さらに捏造説も出たが、厳密な化学的分析の結果、そうした疑いは否定されている。

②青銅刀子

鳥海山の麓、山形県飽海郡遊佐町大字女鹿字三崎山の縄文後期中葉の住居遺跡より出土。中国殷時代B C千三百年から千年頃の殷墟である河南省安陽県小屯の遺跡から出土した青銅刀子と類似しているとされる。なお、北部日本（北海道から青森）の縄文時代晩期の内反石刀は、この青銅刀子を模倣したものではないかと見られている。この青銅刀子は対馬海流に乗って、出羽の地に着いたと考えられる。鳥海山はその特異な山容から、海上からの目印（ランドマーク）になっていたとされる。6世紀から9世紀にかけては、渤海の使者が出羽に何回も来ている。また、出羽柵には征狄所が置かれた。出羽や越前のあたりは肅慎が渡来している。“夷”と“狄”は民族的に違う人々であったと思われる。日本海沿岸はまさに大陸との玄関口であった。私は“環日本海文化圏”を想定したい。

【弥生時代（縄文時代晩期）】

③稲作文化

佐賀県唐津市の菜畑遺跡（縄文時代晩期後半）や福岡県福岡市板付遺跡（縄文時代終末期）と同じくらい古い水田跡が、青森県弘前市の砂沢遺跡（縄文時代終末期）で発見されている。なお、砂沢遺跡では遠賀川式土器（弥生時代初期）が出土している。

【古墳時代】

④錫釧

錫製の釧は西日本での出土例はほとんどみられず、北海道から東北にかけての末期古墳群からの出土例が多い。北海道積丹半島経由での、大陸との流通が考えられる。

⑤ガラス製金張丸玉（ゴールドデンサンドイッチガラス）

岩手県北上市江釣子古墳群（A D七世紀後半から八世紀前半に築造）より出土。これと良く似たガラス玉が、京都府長岡京市にある5世紀前半の宇津久志1号墳、奈良県橿原市にある5世紀後半の新沢千塚古墳群の126号墳で見つかっている。宇津久志1号墳のガラス玉については、分析の

結果1〜4世紀に古帝政ローマ領内のエジプトかシリアで作られた物と見られ、国内最古

級とされている。江釣子古墳群のガラス玉は畿内經由かもしれないが、そのようなガラス玉が東北にもたらされているということは、なぜであらうか？

⑥獅子嚙式三累環頭柄頭(青銅製)

7世紀後半から9世紀後半に築造された蝦夷の墳墓(末期古墳)とされる青森県八戸市丹後平古墳)の15号墳の周溝から出土。国内では、「獅子嚙」と「三環」が合わせられた形の柄頭の出土例は無く、新羅、韓国全羅南道羅州市の「伏岩里三号墳」の横穴式石室から同じようなタイプの物が発見されている。それがなぜ、蝦夷の墳墓にあつたのかはわからない。丹後平古墳群からは、その他和同開珎、馬具の轡、鉄製のか帯金具等が出土している。

⑦馬、馬具

蝦夷は馬を飼っており、馬の埋葬墓や墳墓の副葬品に馬具が多く含まれている。なぜ、蝦夷は馬を飼っていたのか？日本の馬の起源は、モンゴル高原から朝鮮半島經由で渡来した蒙古系馬とされる。が、東北の蝦夷の地に馬をもたらししたのは誰か？

東北日本には在来馬として、縄文後期に中国華南地方から台湾、琉球諸島、薩南諸島を通じ、広西矮馬や中国西南山地馬(四川馬、雲南馬の

ルーツと言われる)を母体とする小型馬が導入され、与那国馬、宮古馬、トカラ馬、野間馬が作られた。弥生時代末には内蒙古、河北、遼寧、吉林から朝鮮半島を通じて蒙古馬(中央アジアのタルパン系高原馬とも言われる)を母体とする中型馬が導入され、御崎馬、木曾馬、土産馬が作られた、とされる。古墳時代になり、岩手

県胆沢町の角塚古墳(5世紀後半築造)からは、馬形埴輪の一部が出土している。また、その古墳を造営したと思われる人々の集落跡である5世紀前半の前半入遺跡(水沢市佐倉河)から、小型馬3頭分の骨が出土している。これらは、東北最古の馬関連の遺跡とされている。先述の丹後平古墳群からは、6世紀代の馬具と中型馬の骨が出土している。蝦夷の馬が文献に初めて記録されたのは『扶桑略記』で、718(養老2)年、出羽と渡嶋蝦夷が馬を朝廷に献上したとある。「渡嶋蝦夷」の「渡嶋」は、現北海道の渡嶋半島とされるが、津軽半島の辺りを「渡嶋」とみる説もある。また、北海道に馬が渡つて来たのは、18世紀末ごろで、8世紀代の北海道に馬はいなかったとされる。ただし、石狩平野部の末期古墳群からは、馬具の轡が出土している。全くいなかったかどうかは不明であるが、少なくともアイヌ民族は馬を飼ってい

なかった。これは「蝦夷」との大きな違いである。

ではなぜ、蝦夷は馬を飼っていたのか？馬を飼う技術はどのようにして得たのか？一時期「騎馬民族征服王朝説」がブームになったが(現在この説は否定されている)、律令制下で、信濃、甲斐、武蔵、上野等東国には数多くの「牧」があり、渡来人が営んでいた。その人々が、蝦夷等の先住民と融合しながら牧草を求めて自然に移動して行ったのか？または、先住民が畿内政権と対峙するために独自に大陸から直接輸入し、軍事用または交易品として飼育していたのか？そもそも蝦夷とは誰か？短絡的な考え方も知れないが、蝦夷の主体は実は「渡来系集団」であつたのではないか？その集団は、畿内政権(百済系中心)とは対立的な関係にあつた渡来人(高句麗系、その他の北方系)で、まさに「まつろわぬ」人々である。その人々が在地の先住民と融合して「蝦夷」と称される集団を形成して行った。つまり、蝦夷集団の女性の多くは縄文系で、男性は大陸からの渡来人が主体であつたと考えられないだろうか？そしてさらに、母系社会であれば、地名に母語として縄文系(アイヌ語系)の言葉が残された……。

以上、いくつかの例をあげたが、その他に古代中国特有の器形とされる、縄文時代晩期の「三足・高状土器」が青森県と九州北部一帯から集中して出土している。大陸との交流は、九州、山陰、畿内等の西日本からのみか玄関ではない。西日本を経ないで直接東北地域にも、縄文時代から交流があったであろうことを、忘れないようにしたい。

〈参考文献〉

- ・『縄文時代の渡来文化刻文付石斧とその周辺』 浅川利一・安孫子昭二編、二〇〇二年初版 雄山閣出版
- ・『江釣子古墳群の謎 古代東北と蝦夷』 大友幸男著 一九九四年第一版、三一書房

- ・『蝦夷の考古学』 松本建速著 二〇〇六年発行 同成社
- ・『古代蝦夷社会の成立』 八木光則著 二〇一〇年発行 同成社

会員の活動

▽ 新井宏氏

鶴岡八幡宮の神道総合誌『悠久』の一三三三号(平成25年7月発行)に「延喜式の布」という特

集が企画されています。

そこに「延喜式の度量衡」という題の執筆依頼があり、8頁ほどの小論文を書きました。(株)おふうの編集によるもので、品の良い雑誌です。

六月の講演要旨 千坂 精一

もはや生き証人のいない時代のことは真実がわかるはずがない。

そこで書き手は、丹念な取材や史料調査を重ねてこれが真実だと思われるものを探り当てて発表する。

そして、それら諸説のなかからもっとも一般受けするものがやがて定説となつて落ち着くと、それが真実と思ひ込まれてしまいもはやくつがえすことは至難になってしまう。

それどころか定説に逆らうと噴飯ものだと嘲笑を買うのが落ちである。

だから、自説を真実と思われるまでに昇華させて定着させるには、他説を風潰しに抹殺してしまわなければならない。

そんなことからいまや定説になつている『忠臣蔵』の虚構部分について考察する

幹事からのお知らせ

下山田さんが体調を崩して、当分、史遊会の事務の担当をお休みします。

その間の事務は原則として、顧問の新井宏さんにお願ひすることになりました。

担当して頂く業務は、① 会場の手配、② 史遊会通信の編集・印刷、③ 史遊会通信の発送の三点です。会計などの庶務は幹事の村上邦治さんが担当します。

それに伴い、会員や友の会会員の原稿送り先を

〒252-0242 相模原市中央区横山 2-14-6 新井宏

として下さい。また、パソコン原稿やワープロ原稿の方は、極力、電子メール添付ファイルとして送って下さい。校正も電子メールで行います。字数などについては、あまり厳格に制限せず、場合によっては、空白スペースが生じても、良いことと致します。

メールアドレスは 通信表題下にあります。なお 8月28日に顧問・幹事会が予定されています。その際に、今後の運営等について、原案をまとめ、9月25日の史遊会でお計らいする予定です。